



焼成する。また打錠法も採用することができる。

維持せざる金屬加壓機の製造は高い費用を要するが、ある程度以上に製造量にするためには、金屬加壓機を加圧法を必要とし実用的でない。金屬として相対強度で  $0.0 \sim 200 \text{ ksi}$ 、温度  $1 \sim 10$   $^{\circ}\text{F}$  の範囲が適当である。

このようににして調製された樹脂の特性は前記のとおり、孔孔隙率  $100\%$  以上の占むる細孔孔隙率は  $0.15 \text{ cm}^3/\text{g}$  以上であることが必要であり、また全細孔孔隙率が  $0.8 \text{ cm}^3/\text{g}$  以上、比表面積が  $800 \text{ m}^2/\text{g}$  以上であることが望ましい。従つてこれらの特性を決定するシリカ・アルミナ配合の調製条件を適当にコントロールすることが必要である。

本邦の兵隊に白つては反政府態度を著せしめてゐる。これら二つの點とすることが必要であつて、これより往後では反政府性が往くつて初期の反政府がよりたぐ、また強硬になると空想無稽が不安定となり、かつアンマツと反黨の反政府によるもの、三點が著しくなるので討たしむる。

また、湖沼中では生存する環境に対して選択性をもつて反汚濁の機能は従来の物質に比べて広く、反汚濁効果は反汚濁をうめるための作用機能が広く、反汚濁の機能を強化するための作用が大まかに反汚濁の機能を強化することをする必要があるので反汚濁が可能である。さらに反汚濁性があるため反汚濁プロセスに対して生物的反汚濁プロセスを適用するのは改善することになる。その結果、上の利点も有している。

工部局

了。I、II号水ガラスから得た $\text{SiO}_2\cdot n\text{H}_2\text{O}$ ドロゾル中に  
酸解アルミニウムを添加した後、ジメチルアミンで  
中和して $\text{SiO}_2\cdot n\text{H}_2\text{O}$ ドロゾルを調製した。この  
 $\text{H}_2\text{O}$ ドロゾルを洗浄し、最終の投料出し位置調整  
によって乾燥した。この既製品を予備乾燥の後、  
急いで乾燥し $\text{SiO}_2\cdot n\text{H}_2\text{O}$ 湿体を得た。 $\text{SiO}_2\cdot n\text{H}_2\text{O}$   
湿体の調製時にその熱収縮率を変化させることに依  
りて細孔密度の異なる二種の湿体を調製した。  
得られたシリカ・アルミナ湿体の形状は、I、II号ス  
ラッシュ（図）であり、その特性を表1に示した。

シリカ含有量はすべて80%以上であつた。  
これらのシリカ・アルミナ複体は、現在に及ぶ  
て液体中から90%の収とせるように乾燥して  
一試を保持させ、110度で乾燥の体気状態中で  
50度の時間置しな配供したが60時の温度  
の初性を決りて対応する液体の特性とともに物性

反黨反社會反革命分子，企圖破壞全場運動。

-347-

応答に約10%を充て、電圧増加率  
 によって所定の曲線に保った。NO 400ppm、  
 NH<sub>3</sub> 500ppm、CO 1500ppm、O<sub>2</sub> 5%、H<sub>2</sub>O 10%  
 の混合ガスよりなる脱酸素ガスを60%Ar(57%)の  
 希薄で導入し、600℃における脱酸素出口のNO  
 濃度を測定して、NO転化率を算出した。

算入され得られた改良成績を $100.0\%$ 以上とする。結衣紙の増減で示す紙孔虫をもつ紙孔率を $10\%$ 以上を超過する紙孔率とした。これより本虫感染については使用される紙の紙孔虫および紙孔率が非常に大きな影響を及ぼす。紙孔率 $10\%$ 以上を超過するためには少なくとも $100.0\%$ 以上の紙孔虫をもつ紙孔率が $0.01\%$ 以上でなければならぬことが認められる。

名 称	A	B	C	D	E
比较强度 ( $\text{N}/\text{mm}^2$ )	303 (450)	307 (413)	393 (581)	397 (587)	364 (551)
平均抗拉强度 ( $\text{MPa}$ )	0.69 (0.89)	0.68 (0.74)	0.83 (0.78)	0.69 (0.69)	0.37 (0.48)
弹性模量 ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )	0.30 (0.64)	0.28 (0.50)	0.19 (0.30)	0.09 (0.13)	0.04 (0.04)

( )内は扭体の値

の条件下で、上記の距離をそれぞれ $2.5 \times 10^4$  間隔とした。

これらの処理を同じした樹液を未処理の新伐型の新伐型樹液と対照し、その反応成績の特性を試みる同じ方法で実験した。この結果からシリカ含有量を $0.01\%$  間隔併記した。この結果からシリカ含有量の少ないシリカ・アムイナを粗体とする樹液は粗体の $80\%$  特性が低く、少なくともシリカ含有量は $0.01\%$  以上のシリカ・アムイナが粗体として好ましいことが認められる。

● 招体および処遇の制度

名 称	Σ	P	Q	R	I
500g以上の粗粒の含有率(%)	0.0	20.1	01.1	71.6	98.1
比較粗度(μ <sup>2</sup> /P)	207 (486)	208 (380)	334 (492)	300 (379)	338 (416)
全粗粒数(μ <sup>2</sup> /P)	0.75 (0.92)	0.70 (0.69)	0.80 (1.05)	0.86 (0.87)	0.71 (0.87)
直径150μ以上の粗粒数(μ <sup>2</sup> /P)	0.28 (0.31)	0.16 (0.16)	0.18 (0.24)	0.31 (0.36)	0.31 (0.44)

第3図に得られた反応低濃度の酸素化を示した。  
 $\text{Fe} - \text{Al}_2\text{O}_3$  両相体の場合には1000時間以上過  
 熱すると低圧低下の傾向がみられるのに対しシリ  
 カ・アルミナ相体の場合には約3000時間加熱時

はも活性は持続している。

図面の簡単な説明

第1図は、反応活性に及ぼす触媒組成の形を示すグラフ。

第2図は、シリカ・アルミナ担体中のシリカ含有率と初期活性および40%処理後の活性の関係を示すグラフ。

第3図は、長期連続試験における触媒の活性変化を示すグラフである。

出願人 日本触媒株式会社  
代理人 坂本 敏一

第1図

